
しるし

坂田火魯志

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
しるし

【Nコード】
N5533G

【作者名】
坂田火魯志

【あらすじ】
三日月の痣。これは幸運の痣だった。それが娘にもできていて。親子のお話です。

第一章

しるし

「あれ、この娘」

「そうね」

両親は生まれた時にすぐに気付いた。

「こんな所に痣が」

「まあここならいいかな」

生まれたばかりの赤ん坊の右手の甲を見てそれぞれ言っただった。

「顔にあるわけじゃないし」

「そうね。それにしても」

若く美しい母親がここで言う。

「この痣。変わった形してるわね」

「三日月なんてな」

彼女よりは少しだけ年長に見える父親も言った。

「普通ないよな」

「ないわよ、こんなの」

見れば本当に右手の甲にその痣がある。青い三日月の痣が。まるで紋章のようにそこにあるのだった。

「どうしてかしら」

母親は首を傾げざるを得なかった。

「こんな痣が出るなんて」

「俺に言われてもな」

父親も自分の妻と同じく首を傾げるしかなかった。

「これは。ちよつとな」

「わからないわよね」

「けれど悪いものじゃないだろ」

だが父親はこうも言っただった。

「これはな」

「悪いものじゃないの？」

「月にだって神様や仏様がいるだろ」

「彼が言うにはこういうことだった。」

「そうだろ？太陽と同じでな」

「それはそうね」

このことは母親も少しではあるが知っていた。昔から太陽や月にはそれぞれ神がいる。ギリシアでも日本でもそこには神がいる。無論仏教でもそれぞれを司る仏が存在している。

「だったら」

「悪いものじゃないさ」

彼は今度は先程より確かな声になっていた。

「だからな。これについては」

「悲しんだり心配することはないのね」

「お月様を守ってくれるさ」

妻に対してこうも言うのだった。同時にその我が子に対しても。

「必ずな」

「そうね。絶対にね」

「この娘はお月様に守られているんだ」

ここでその我が子を見るのだった。

「思えば幸せな娘さ」

「そうね。私達だけじゃなくね」

これが海老原美月の生まれた時の話である。彼女は右手の甲に三日月の痣を持って生まれた。これは成長しても消えず学校に行くようになったても目立っていた。痣についていつも言われるのだ。

「何か海老原の痣ってよ」

「ああ、何か漫画とかに出て来るみたいだよな」

男の子達はこう言うのだった。

「紋章とかそういうのだよな」

「右手が光ったりしてな。出て来るそれだよな」

「光ったりしないわよ」

美月は笑ってそれを否定する。彼女は小柄で少し垂れ目だが優しい顔立ちをした女の子になっていた。黒い髪をそのまま後ろに垂らしている。

「そんなの」

「けれどよ。何かよ」

「お月様にしか見えないしな」

「そうなのよね」

これは彼女が一番よくわかっていた。

「この痣ね。生まれた時からあるのよ」

「生まれた時からかよ」

「ええ。生まれた時から」

ここでその痣を見るのだった。やはり右手の甲にその青い三日月を見せている。

「あつたのよ。ずっとね」

「またそりや変わってるな」

「普通ねえだろ」

「お父さんとお母さんは私がお月様に守られてる証拠だって言うけれど」

自分でもそれは聞いているのだった。両親は今でも彼女にこう話す。

「けれど。私は別に」

「気にしちゃいないってか？」

「気にはしているわ」

それはそれ、これはこれだった。

「けれどね。別にお月様に守られてるなんてのは」

「考えてねえのか」

「誰だって同じじゃない」

そしてこう皆に言うのだった。

「こういうのって。そうでしょ？」

「まあそうだよな」

「それはな」

皆も今の美月の言葉に頷く。言われてみれば確かにその通りである。

第二章

「結局誰だつてな」

「同じだよな、人間なんだからよ」

「けれどこの痣は」

美月は皆同じと言ったうえでまたその痣を見るのだった。

「ずっと一緒なのよね」

「嫌か？」

「それはないわ」

実はそれはないのだった。生まれた時からあるしそれで別にいじめられたり意地悪をされたこともない。何しろ形が形なのでまるで漫画みたいだと今のように言われることはあってもだ。それでもこの痣が原因で何かをされたということはなかった。だから愛着さえあった。

「けれど。私だけなのよね」

ふと寂しい顔を見せた。

「この痣があるのって。お父さんにもお母さんにもないし」

「やっぱり何かあるんじゃないのか？」

「月の戦士の証とかよ」

「だから。そういうのじゃなくて」

漫画的な話から離れない男の子達に対して言い返す。

「この痣。お兄ちゃんにも妹達にもないし」

「普通はないよな」

「そこまで見事な形の痣はな」

「私だけなのよ」

このことをまた言う。寂しい顔で。

「この痣。どうしてあるのかしら、本当に」

考えてみれば不思議なことである。成長するにつれそうしたこと考えるようになっていた。だがそんな時だった。彼女の叔母、母

の妹が家に尋ねてきた。美月は母親似であるが彼女もまた姉によく似ていた。その叔母がやって来たのである。

「美月ちゃん相変わらず元気みたいね」

「ええ」

まずはその自分によく似た叔母に挨拶をした。

「叔母さんも元気みたいね」

「私もね。悪いことに旦那も元気で」

叔母はここではふざけてきた。

「今日も野球を観に行ったわよ」

「野球に？」

「阪神の試合にね」

言いながら顔を苦笑いにさせる叔母であった。

「全く。野球はパリーグよパリーグ」

「パリーグなの？」

「それも鷹よ」

実は彼女はホークスファンなのだった。美月も他の一族も皆セリーグで阪神を応援しているが彼女だけはホークスファンだ。異端と言えば異端である。

「巨人応援するよりずっとましだけれどね。それで私は行かなかったから」

「ここに来たのね」

「そういうこと。まあ美月ちゃんが元気そうでよかったわ」

「それはね」

「相変わらずその痣も格好いいし」

彼女もまた美月の痣について言うのだった。

「何よりだわ」

「この痣ね」

「嫌なの？」

俯いてその痣を見た美月に対して問う。

「その痣。別にいじめられたりしてないんでしょ？」

「それはないけれど」

隠すことなく答えた。

「けれど。どうしてこんな痣が」

「ああ、それね」

叔母は困った顔になって言う美月に対して声を明るくさせてきた。

「私にもあるわよ」

「叔母さんにも!？」

「そうよ、あるわよ」

叔母は明るく笑いながら美月に話す。

「ちゃんとね」

「何処に？」

「ほら、ここよ」

ここで首のところを見せてきた。見ると左の首筋の奥に彼女と同じものがあつた。

「ほらね、ここにあるでしょ」

「本当……」

「実はこれって遺伝なのよ」

こう美月に話す。

「お姉ちゃんから聞かなかったの？」

「全然」

実はそうした話も今聞いた。今まで全く聞かなかった話である。

「この痣がお月様に守られてる証だって言われたことはあったけれど」

「何よ、それ」

叔母は彼女のその話を聞いて屈託のない笑顔になった。

「私がお母さんに言われたのと同じじゃない」

「叔母さんのお母さんっていうと」

美月は彼女の話の聞いて考えだした。答えはすぐに出た。

「お婆ちゃんに？」

「お婆ちゃんのお姉ちゃんにも同じ痣があるのよ」

「大叔母さんにも」

血筋はさらにさかのぼっていた。

「この痣があるの」

「あるわよ。あの人は背中にな」

「ふうん、そうなの」

「だからね。この痣はね」

美月にさらに話す。

第三章

「代々伝わっているのよ。家系にね」

「そういうのだったの」

「どうしてお姉ちゃんの話さなかったのかしら」

叔母はそのことを不思議に思いはじめた。

「知ってるのに」

「お父さんに遠慮したのかしら」

美月はこう考えた。

「こうした痣が家系に引き継がれていくってやっぱり変わったことだし」

「隠す必要もないと思うけれどね」

「お母さん遠慮する性格だから」

「昔からね」

こうしたことは妹である彼女の方がより知っているようである。

また明るい笑顔になった。

「そうなのよね。お姉ちゃん謙虚でね」

「私にも偉そうにするなって言うわ、いつも」

「それでいいのよ」

だがそれでいいとも言うのだった。

「それでね。人間偉ぶっても何にもならないから」

「それは何となく」

彼女にもわかった。偉そうにしている人間は周りから好かれなことは学校のある教師を見ていてわかることだった。そうした教師は残念なことに実に多い。

「わかるけれど」

「だからあんたにも言わなかった」

彼女にもわかった。

「そういうことね。けれどね」

「ええ」

そのうえでさらに話をするのだった。美月もその話を聞く。

「この痣。あんたが結婚してね」

「私に子供が生まれたら」

「出るかも知れないわよ」

こう話すのだった。

「女の子だけに出て出るのは兄弟で一人だけだけれど」

「ひよっとしたらなの」

自分の右手の痣をここで見た。その痣を。

「この痣が」

「私の娘にもあるから」

叔母は自分の家族のことも話した。

「左肩にね。あるのよ」

「左肩に」

「それで悪いことは何もないし」

「そうね。何か漫画みたいだって言われたことはあるけれど」

右手の甲を顔に近付けてさらにまじまじと見る。覚えている限りこの痣でいじめられたりからかわれたりしたことはない。漫画やゲームの設定のようだと言われたことはあってもだ。形が神秘的なのでそういうふうに言われたことは今までないのだ。

「それでもね」

「私もよ。だからね」

「娘に出ても気にしなくていいのね」

「そういうこと」

結論としてはそうだった。

「それでね。いいから」

「そうなの。じゃあ」

「さて、誰に出るかしらね」

叔母はにこにことして美月に話す。

「あんたが結婚して子供ができたら誰に」

「この痣が」

「この痣が出る娘には本当にいいことがあるしね」

「本当につて!？」

「いい相手が来るわよ」

こう美月に語るのだった。

「私の旦那みたいにね」

「叔母さんの旦那様みたいに」

「ホークスファンなのは御愛嬌」

実はそのことには案外悪いようには思っていないようである。

第四章

「それ以外はイケメンだし背は高いし性格は男らしくて」
「うん」

「しかも何をやってても器用だしね。自慢の旦那よ」
「私もそういう人に出会えるの」

「その痣は月の神様が護ってくれてるって証よ」
母と同じことを言ってきた。

「だからね。そのことは安心していいわ」
「わかったわ。それじゃあ」

またその痣を見ながら叔母の言葉に頷く。

「そうした人に出会えるのを楽しみにしてるわ」
「絶対にね」

叔母との話で気持ちが完全に楽になった。何故あるのかということとがわかってしかもそれでいいことがあるとも言われて。気が楽になった彼女はそれからさらに明るくなった。その明るさは周りの評判になっていった。

それは成長してから、学生から働くようになってからも変わらなかった。そうして勤めていた会社で素晴らしい人に出会い結婚することになった。彼は美月が見たこともないような人間で性格は仏のようだった。外見も穏やかでとてもいい印象を与えてくれるものだった。

その彼と出会ってからはずだった。結婚して一生を共に暮らすことになった。彼女はまず男の子を産んだ。そして暫くして二人目を妊娠した。この時に彼女は夫に言うのだった。

「女の子だったらね」

「何かあるの？」

「ほら、これ」

ここで自分の右手のその三日月の青い痣を見せる。

「この痣だけれど」

「その痣がどうかしたの？」

「結婚する時に話したわよね」

彼女はこのことには遠慮せず全てを話したのである。

「私の家系にその兄弟で一人、女の子に絶対に出る」

「その痣だね」

「そう、この痣よ」

痣を見せながら話を続ける。

「若し。今度生まれるのが女の子だったら」

「出るかも知れないんだね」

「ええ。楽しみにしてるといいわ」

「三日月の幸せの痣」

美月はその痣をこう呼んだ。

「この娘が女の子だったらひよつとしたら」

「出て来るのかも」

二人でそのことを考えていた。そうして子供が生まれた時だった。

「どうだったの？」

「男の子か女の子かってこと？」

「ええ。どっちなの？」

美月は最初に夫にそのことを尋ねた。

「男の子なの？女の子なの？」

「女の子だよ」

夫は笑顔で妻に告げた。

「ほら、ここにいるよ」

「あつ、そうね」

美月は今産後の床にいた。白い病室で同じく白いベッドの中に横たわっている。出産でかなり疲れているがそれでもしっかりしていた。夫とも話すことができた。

「この娘に」

「痣だけれど」

「わからないかしら」

出産の時はいささか難産でそれを確かめるどころではなかったのだ。それで今夫にそのことを尋ねているのである。

「あるのかどうかは」

「あるよ」

しかし夫は妻にこう答えたのだった。

「痣はね。ちゃんとね」

「あるの？」

「うん、ほら」

こう言つてその赤ん坊が寝かされているベッドがそつと近付けられた。すると美月は自分の娘の左手を見た。するとそこには。

「この娘はそこなのね」

「うん、ここにあつたよ」

また妻に話した。

「ここにね」

「この娘は左手なのね」

見ればそうだった。娘には左手にあるのだった。

「それもそこに」

「君は右手の甲で」

「この娘は左手の手の平」

「ある場所は逆だね」

右に左、それに甲に平だった。場所は確かに逆だった。

「けれどそれでも」

「痣の形は一緒」

それはその通りだった。

「痣は一緒なのね。やっぱり」

「そうだね。痣の形はね」

三日月の青い痣はそのままだった。それは変わらなかった。場所は正反対だがそれでも痣は同じだった。それだけは同じだったのは「一緒だよ」

「しるしは同じ」

美月は穏やかな、それでいて優しい笑顔で語った。

「母娘だからなのね」

「そうだね。親子だから」

「ええ」

夫の言葉に静かに頷く。

「そうね。一緒なのね」

そのことを見るのだった。ある場所は違ってもそれでもそれは同じだから。

「それじゃあこの娘も」

「将来。幸せに」

「なれるわ。私みたいに」

今度は娘の顔をじつと見ていた。その顔もまた美月と同じだった。母娘の絆はしるしによって生まれた時から確かになっていた。美月はそのことも喜んでいたのだった。

しるし 完

2009・2・23

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5533g/>

しるし

2010年10月8日15時33分発行